

1. 「中国ビジネスに失敗しない7つのポイント」
2. 「中国マネーの正体」
3. 「中国革命の真実」
4. 「豹変した中国人がアメリカをボロボロにした」
5. 「中国人はなぜうるさいのか」

1. 「中国ビジネスに失敗しない7つのポイント」 杉田敏著 角川書店 10月15日

副題：「PR戦略で乗り越える！」 帯の言葉：「中国の落とし穴に落ちないために」

巷には、中国市場に売り込むためのハウツー本が溢れかえっているのですが、この本もその類であろうと思いつつ読み進めた。しかし予想に反してこの本はおもしろかった。この本で杉田敏氏は、「中国における広報」という立場から、中国市場を眺めている。本書は一般的な「中国ビジネスのハウツー本」ではなくて、「広報」という点にしぼって書いている。そのような視点から、中国を取り上げている本は少ないだけに、中国市場で金儲けをしようと考えているビジネスマンには参考になる本である。この本も題名と中身がかなり違う本であり、私ならば題名を、「PR戦略で乗り越える中国ビジネス」と付けただろう。多分、その方が売れたと思う。

まず杉田氏は、「覚えておくべき“抗日記念日”」として、それをリストアップしている。次に“南京大虐殺”について意見を聞かれたら…として、「そうした歴史があることは非常に残念ですが、私たちは経済を通じて日中の友好に貢献していきたいと思っています」という模範解答を示している。私もこの答えがよいと思う。また台湾問題についても、その表記方法を含めて詳しく解説し、「天安門事件」、「法輪功」、「チベット問題」などの用語はタブーであると書いている。さらに広報をする場合の細かい注意事項を記している。中でも「中国で忌み嫌われる数字に250があります」という記述には、私も初めてお目にかかった。「250は500の半分で、1000の1/4なので、日本語の“半人前”よりもさらに悪く、“アホ”“バカ”“間抜け”ということ」だそうである。

杉田氏は新聞記者などに支払う礼金について、「記者会見での各種の“礼金”受け取りも一律に禁じています。ただ現実には、記者会見に出席した記者たちに対して、“交通費”を渡すことは不文律として残っています。1人当たり100～300円(約1200～3600円)くらいが相場です」(P. 95)と、金額を明示し書いている。このような礼金の類については、なかなか相場がわからないので、これは参考になる。ただし杉田氏は後半でも同様のことを、「大体イベントや記者会見などの際には300円から500円、インタビューには500円から1000円(テレビの場合にはさらに割高に)、プレスツアーに参加してもらう際には中国国内の場合で500円から1000円、海外の場合には1日当たり400円から800円を支払うというのが“相場”となっています」(P. 162)と書いており、若干高くなっている。

杉田氏は、「今、コミュニケーションの世界では“産業革命”に匹敵するくらい大きな変化が起きています」と書き、特にインターネットの世界での激変と、加えて中国でのネット社会の難しさや面白さを詳しく紹介している。また中国に進出している日本企業は、「中国社会のニーズに合致し、政府の賛同が得られ、さらにパブリシティ価値がある広報活動を効果的に行っていかなければなりません」と記している。また「問題が起きたときは、“100%無傷で危機回避するのは不可能”ということを理解しておくべきです」と、進出日本企業に注意を喚起している。

最後に杉田氏は、中国において「見えない落とし穴」にはまらないようにするための広報に関する10の注意事項を書いている。これは、今後、中国市場で闘うビジネスマンには、たいへん参考になる指摘である。

2. 「日本に群がる！ 中国マネーの正体」 富坂聰著 PHP 研究所 11月1日

帯の言葉：「世界一羽振りのいい金持ちが求める“3つの宝”とは？ 中国の喰らうほどの財力をビジネスに利用せよ！」

富坂聰氏の原著「中国の地下経済」は秀作であった。それだけに私は、今回の著書が「中国マネーの正体」を鋭く暴いたものだろうと期待して、読み進んだ。しかしながら本文中で富坂氏が書いているのは、「この矛盾を抱えた中国が、経済失速が本格化する前に打ち上げる花火、日本人が絶対に逃してならないものこそ、このビッグウェーブをつかむことなのだ」という内容であり、「中国マネーの正体の分析」ではなかった。実際にこの本の2/3は、いかに中国人マネーを利用して儲けるかという話で埋まっている。富坂氏はこの本の題名を、「中国人マネーを掴み大儲けする方法」とでも付けるべきであった。また帯の言葉をそのまま題名にすれば良かったと思う。この本も題名と中身が違う「羊頭狗肉」の書の類に近く、その中身も従来の富坂氏のものとはかなり趣を異にしている。残念ながらこの本は、富坂氏の著作中では失敗作の類ではないかと、私は思う。

本著で富坂氏は、「チャイナマネーの流入と聞けば、現在のところほとんどの日本人は、中国人による土地の買い占めの話題を思い浮かべるはずだ。そして、いつのまにか自分の住む町が“中国人によって占拠され、生活そのものがチャイニーズスタイルに染められてしまう”もしくは“乗っ取られてしまう”との心配へつながっていくようだ。…(略)。中国や中国人が戦略的に一つの国を乗っ取ろうとしていると考えるのは、およそ馬鹿げた話である」、「今回、中国からさまざま

まな形で接触を受けた日本の中小企業からはいろいろな話を聞くことができた。そして分かったことは、こうした話題では常に心配の種として付きまとう“技術が流出する”とか“金にモノを言わせて買い叩かれる”といった問題がそれほど現実的ではないということだ」と、明快に主張している。私は、この富坂氏の主張を全面的に支持する。

富坂氏は、中国の近未来を予測するカギとして、胡錦濤主席の「今後5年間、中国は海外進出戦略に力を入れ、国内企業の対外投資を後押ししていくからだ」と、温家宝首相の「人民元の柔軟性向上など、あらゆる物価抑制策を探る」の二つの発言を取り上げ、「この発言だけで中国の未来が見えればよほどの中国通だが、ここでは少し丁寧に2人のリーダーの発言を掘り下げてみたい」と書き、それぞれの発言を分析し解説している。ところがこれに続く本文中では、温家宝首相の発言の解説が約25ページ、胡錦濤主席の発言の解説が約1ページとなっており、明らかに不均等な紹介で、いささかこじつけ気味になっている。

富坂氏はこれからの中国を知る一つのキーワードとして「人口ボーナスの枯渇」をあげ、それが2010年ごろであるとし、ルイス転換点に到達したのも今年だという学者の説を紹介している。しかし実際には中国では、労働力不足は2003年に表面化しているし、京都大学の劉徳強教授は2002～04年にルイス転換点に到達したと指摘している。また富坂氏は「人口ボーナスの枯渇」の根本原因が広範なモグリ企業存在にあることを正確に認識しておらず、そのために2011年度旧正月明けの一時的な人手不足緩和現象も把握できていない。なお富坂氏は、労働集約型外資の夜逃げの多発を2007年の旧正月明けとしているが、これは2008年の旧正月明けの誤りである。07年度にはまだ夜逃げは表面化していない。さらに2007年末の労働契約法の施行の理由を、「この背景にあったのは労働災害の増加だったと言われている」としているが、この分析は根拠薄弱である。労働契約法の施行は、北京五輪開催への外圧であったと考えるのが正しい。「賃上げウェーブ」の裏には、ビジネスの“種”を探して労働者を裏から扇動する弁護士が存在があった」という指摘も見当違いである。総じてこの章の富坂氏の分析には、事実誤認と偏見が多い。

3. 「中国革命の真実」 くどうひろし著 柘植書房新社 10月15日

副題：「過渡期への手付」

この本は、トロツキストつまり極左冒険主義者のくどうひろし氏が書いたものである。最近、学者や保守派の論客を自称する人たちの本を読みなれている私は、久方ぶりに極左冒険主義者の生硬な文体にお目にかかり、学生時代に連れ戻されたようなある種の懐かしさを感じた。この本のくどう氏の文章には、日本語としての整合性が取れていない部分が多く、読み難い。これも往年の闘士の名残であろうか。

くどう氏の副題「過渡期への手付」は、そのまま第12章の題名になっている。その章をよく読んでも、私にはどうしてもその意味がわからなかった。私が「手付」という意味を取り違えているかもしれないと考え、辞書で調べてみたが、「手を付けること、手付け金」などの説明があるのみで、その言葉に特別な意味があるわけではなかった。昔日の極左冒険主義者たちは唯我独尊的などころがあり、他人の理解不能な言辞をふりかざし大衆を扇動していた。くどう氏のこの文章を読んでいて、ついつい私はそれを思い出してしまった。

くどう氏はこの本の構成を、第1～8章までを中国成立前、第9～11章を毛沢東専制期、第12章と補章を改革開放以後、としている。つまり「中国革命の真実」という題名で、主に中国成立前のことを扱っている。その記述の中では、コミンテルンと中国共産党の関係が深く考察されており、その面では参考になる個所が多い。たとえば、コミンテルンから派遣されたマーリンと陳独秀との第一次国共合作時の確執についての記述は、参考になった。またくどう氏は、孫文について、「孫文が中国ブルジョアジーを組織できなかったのは、彼の力量というよりも、古典的なブルジョア革命論と買弁ブルジョアジーの限界であった。晩年、“連ソ、容共、労農援助”を掲げ、“革命いまだならず”と没したことは、状況の典型的な反映であり、たえず進化を続けた知性と誠実を物語っている」と書いている。

くどう氏は、「毛沢東の人民公社、大躍進の訴えは、天の声、神の言葉だったのである。それを防ぎ歯止めをかけられるのは、マルクス主義者の考え、理論であり、それを理解できる労働者階級存在である。返すがえすも痛恨の極みは、上海クーデターで百万の労働者、革命の精鋭を失ったことである」と書き、革命後の中国の苦難の歴史を、中国の労働者階級が上海クーデターで壊滅したことに帰している。これは前回の読後雑感でも紹介しておいた最近の中国研究の結果とは大きく違う。当時の上海の労働者階級は未成熟で、革命の前衛になり得なかったからである。

くどう氏の結論は次のようなものであるが、これまた理解し難いものである。

「植民地解放、革命が成功しても、それらの労働者が直ちに資本主義を上回る経済を建設するのは難しい。帝国主義はその弱点をついてあこぎな金儲けをはかる。そうした場合、第三世界にとって中国はさまざまな教訓を提示し、政治、経済の大きな拠り所である。先進国の労働者がそれと連帯、交流する意義はきわめて大きい。経済発展の設計と技術を持ち合わせ、活用できるだけでない。労働者のインターナショナルリズムが、新たな国際関係、経済建設への相乗効果を生み、国境を感じさせない社会への萌芽になろう。日本の労働者が社畜を返上し、交流、連帯するならば、中国労働者の自発性が社会の秩序になる時期の到来は、予想以上に早いのではないか。上海コミュンを闘って倒れた労働者階

級の後継ぎが注目される時代になった」。

4. 「豹変した中国人がアメリカをボロボロにした」 川添恵子著 産経新聞出版 10月11日

帯の言葉：「アメリカ西海岸の政治が食われた。アジアの領土は削り取られた。そして日本の拠点に先兵は潜伏中！」

ショッキングな題名の川添恵子氏のこの本は、羊頭狗肉の書の代表格である。なぜなら本文中で、アメリカのことについて書かれている個所は第1章のみで、しかもロスアンジェルスなど一部の地域での中国人の生態について記されているだけだからである。ちなみに第2章は主にフランスのボルドーワイン、第3章はブータンとラオス、第4章は中国の高速鉄道、第5章は日本についての記述である。これほど題名と内容が乖離した本も珍しい。

敵に塩を送るようだが、もし私がこの題名で本を書くとするならば、現在、米国各地で起きている「反ウォール街デモ」をしっかり調査し、この中に新規に移住した中国人が大量に参加していることを実証し、「豹変した中国人がアメリカをボロボロにした」という主旨の文章に仕立てる。ぜひ川添氏には、次回作でこの検証結果を扱ってもらいたい。ただし現時点での私の調査では、このデモにはまったく中国人系は参加していない、つまり「ボロボロにしていない」という結論になりそうである。同様のことは、先日のロンドン暴動でも言える。

川添氏は第5章で、「合法的に乗っ取られる日本」と題して、北海道の地が中国人に買い占められていると書き、その目的を、「目的はリゾート開発？ 土地転売によるキャピタルゲイン狙い？ 自衛隊基地に微妙に近かったりするのほただの偶然？ それとも水源地確保？」と書いている。同じ主旨のことを、保守派の論客の有本香氏は「中国の“日本買収”計画」の中で、「自衛隊、原発、警察一重要施設の周辺は無防備な状態にある。ここ数年、北海道に限らず、全国各地の警察施設や自衛隊、米軍基地に近い場所外国資本による土地買収の話は盛んに聞こえてきている」、「狙いは水か」と記している。この二人の間にある相違点は原発についての記述であり、共通点は「水」である。その中国人の水源地狙いについては、私も徳山ダム調査小論で述べておいたが、それは杞憂に等しいと考える。

川添氏は、日本海横断航路について言及し、「中国は拉致国家・北朝鮮をご都合主義で“飼っている”親玉であり、ロシアからは美人スパイが怪しい物売りが来るだけでは？」と悪態をつき、「日中両国関係者は“砂上の楼閣物語”に陶醉している」と、あざ笑っている。この航路の中国側当事者の琿春市に工場を持ち、この航路の開設と日本海側諸都市の経済発展のために、長年、実際に汗を流して努力を続けてきた私にとっては、これは心外な言葉である。私は一日でも早く、この航路を安定させて川添氏を見返してやりたいと思っている。

5. 「中国人はなぜうるさいのか」 吉田隆著 講談社 10月12日

帯の言葉：「今さら人に聞けない“中国人の歴史”“中国人の謎”誰も教えてくれない“やっかいな中国人”攻略法」

著者の吉田隆氏は本書の冒頭で、「本書は“中国人はなぜうるさいか”という素朴な疑問から始まり、中国人の気質や中国社会の仕組みなどをわかりやすく解説している。これを読んで、中国人というものを理解して真の交流が生まれることになれば幸いである」と書いている。たしかにこの本は、わかりやすく書かれており読みやすいが、中身には新味がまったくない。その意味でこの本は、洪水のように出版されている類書の焼き直しに近い。吉田氏は若き頃にハンガリーに留学した経験を持ち、東欧諸国の造詣が深い。この体験から中国人をみつめ分析すれば、もっとおもしろい本になっていただろう。残念ながら本書には、そのような記述は1箇所しかない。

吉田氏は本文中で、「メディアが喧伝するように中国人が日本の不動産を買い漁っている。というようなことは感じられません」、「北海道の岩内町の温泉付き分譲地180区画が売り出され、そのうち6区画のみが中国人に買われた」という不動産業者の言葉を紹介し、「昨今メディアでは、中国マネーが日本の不動産を買い漁るという報道がされえちるが、どうやらそれはフレームアップされているようだ」と書いている。この指摘は正しい。

また吉田氏は、「中国の大都市の地価の高騰はバブル時代の日本を凌駕するほど凄まじいものとなっており、2010年の上海万博開催前に売り出された上海のマンションでは1㎡212万円という数字が躍っている。これは単純に計算すると50㎡クラスの部屋が1億円を超えるということになるから億ションで、バブル期の日本のマンションの値段をすでに超えているのだ」と書いている。ここで吉田氏の言いたいことは、マンション建設用地の使用権の高騰とその結果のマンション価格の高騰であろうが、商業用地や工業用地はバブル状態ではないことに気が付いていない。吉田氏の頭の中では、土地とマンションが未分化であり、この本はその程度の中国認識に基づいて書かれていると判断することが妥当だと思われる。

以上